

石川達夫

『チェコ・ゴシックの輝き ——ペストの闇から生まれた中世の光』

(2021年、成文社)

チェコ王と神聖ローマ皇帝を兼ねたカレル4世(チェコ王1346～78、神聖ローマ皇帝1346～78)とその息子ヴァーツラフ4世(チェコ王1378～1419、神聖ローマ皇帝1376～1400)の時代に、国際交流が非常に盛んになったプラハとチェコはゴシック文化の一つの拠点となり、多くの壮麗なゴシック建築を造りだし、またチェコ独

特の「美麗様式」と呼ばれる輝かしい美術作品を生み出した。本書は、そのようなプラハとチェコのゴシックの全体像を多数の図版と共に日本で初めて明らかにした研究書である。

二人の国王・皇帝の時代は、実は1347年頃にヨーロッパに到達したペストがパンデミックとなり、ヨーロッパ各地を何度も感染の波が襲って多数の犠牲者を出した時代でもあった。彼らの肉親の何人か——フランス、ハンガリー、イングランドの王妃たち——も、ペストで命を落としている。プラハ大司教イェンシュテインのヤンもペストに感染して死に瀕したが、聖母マリアに助力を乞うて奇跡的に回復し、回復後は聖母の助力に感謝した。このペスト経験は彼にとって深い精神的転機となり、彼は聖母を永遠に若くて美しい女性として表象し、それがチェコの「美麗様式」の成立に大きな影響を与えた。そして、「国際ゴシック様式」の代表的な画家として知られるトシェボニの祭壇のマイスターが制作した、輝くばかりに美しい《ロウドニツェの聖母》(1385～90年)に代表される、一連の「美しい聖母」の制作に繋がった。本書では特に、ミケランジェロの有名な《ピエタ》より約百年前に制作された《クシヴァークのピエタ》(1390～1400年頃?)に代表される、チェコ独特の「血痕聖衣の美しいピエタ」——キリストの血の付いた衣をまとう、若く美しい聖母が息子の遺骸を抱く「美麗様式」のピエタ——の成立過程を明らかにした。

建築や美術だけでなく、文学や音楽においても、チェコ・ゴシックは注目すべき諸作品を生み出した。《クシヴァークのピエタ》とほぼ同時代に書かれた中世チェコ・ドイツ語

文学の傑作『ボヘミアの農夫』(1400年?)は、擬人化された「死」に愛妻を奪われた夫が「死」と論争する作品であり、この作品を補完する性格を持つ中世チェコ語文学の傑作『織匠』(1407年?)は、擬人化された「不幸」に恋人を去らせられた男が「不幸」と論争する作品である。これらの作品は、中世に流行した「論争」のジャンルに属すると同時に、古典古代に根を持つ司牧神学的著作の中の「慰め」のジャンルに属するものであり、死や不幸を経験した人々を「慰める」という性格を持っている。

1400年前後に作られたチェコ・ゴシックの諸作品にはジャンルを超えた共通の基盤と性格があるが、これらの作品が示しているように、不条理な受難をいかに受けとめるか、理不尽な不幸に見舞われた時それと如何に折り合いをつけるかということは、人間にとって、時代と地域を超えた永遠の実存的課題であろう。本書には、「死と不幸を免れない人間には光と慰めが必要だ」という著者の想念が込められている。

(石川達夫)

